

学位論文題名

社会主義経済の転換に関する理論的研究

－市場像からのアプローチ－

学位論文内容の要旨

いまや中東欧の移行諸国の多くがEU加盟を果たしたことから、移行も一段落ついたと考えられており、移行経済に関する議論は過去のものとしてあまり顧み見られることはなくなってきた。しかし、当時の議論を再度振り返ってみると、従来の経済学で意識されることの少なかった「市場像」の違いが明確になってくる。この市場像の違いは単に主流派経済学（新古典派）と異端派経済学という違いにとどまらず、現実の政策、そして経済的結果に大きく影響していることがわかる。そこで、本研究は当時の急進的改革および漸進的改革がそれぞれ支持された理由、そしてその背後にある市場像を再検討することで、従来の経済学の議論で見過ごされてきた問題に焦点を当てる試みである。

第一章では移行が始まる以前の、社会主義計画経済の成り立ちとその崩壊までの経緯を簡単に述べた後、急進的改革が支持された理由を大きく三つの理論的根拠（余剰・レントシーキング・政治的資本）に分類して、それぞれの内容を検討する。その上で、それらに共通する静態的な市場像を取り上げて、そこから導かれる帰結を現実の移行諸国で生じた転換不況と照らし合わせることで、批判的に再考する。

第二章は前章と対照的に、中国の漸進的改革の特徴を考え直す。そして、そこで実施された漸進とは、単にゆっくりとした改革速度を指すわけではないということを明らかにする。初めに、初期条件による説明が十分な答えを与えないことを示し、次に中国政府が掲げる「社会主義市場経済」という概念に表れているかどうか検討する。そして、中国の改革で中心的役割を果たしたものとして、「郷鎮企業」と「双軌制」を取り上げる。その特徴の一つは、旧制度を残すことによる分配上のセーフティーネットは既得権益者の反対を最小限にし、同時に新たな活動を行うことを促進したという点であり、今一つはレントシーキングを排除するよりも生産的な方向に向けるという点である。

第三章では、市場像を形成する一部ともいえる経済主体像から移行の問題にアプローチを行う。合理的な経済主体の活動に任せれば自然と望ましい制度が生じるという考えは、移行経済においても、資本主義経済の場合と同様の、経済主体像が想定されていたからであり、その結果として生じたロシアでの資産収奪の例を述べた後、それと比較して、中国での例がいかにかうまく主体の行動を制限すると同時に、新たな経済的活動を生み出すことにつながったかを述べることで、経済学自体の視野を広げる可能性を示唆する。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 西 部 忠

副 査 教 授 吉 野 悦 雄

副 査 教 授 丸 川 知 雄 (東京大学

社会科学研究所)

学 位 論 文 題 名

社会主義経済の転換に関する理論的研究

－市場像からのアプローチ－

本論文（A4版全100頁，目次，序文，第1章～第3章，結語，参考文献を含む）は，ソ連・東中欧の旧社会主義国の移行，および，中国の社会主義市場経済の転換における急進的改革と漸進的改革に関する従来の議論の背後に存在する「市場像」の違いに焦点を当て，そうした違いが理論的含意，現実的政策，および，その経済効果に対していかなる影響を与えたかを明らかにしようとする試みである。

第一章では，移行が始まる以前の，社会主義計画経済の成り立ちとその崩壊までの経緯を簡単に述べた後，急進的改革が支持された理由を大きく三つの理論的根拠—余剰・レントシーキング・政治的資本—に分類して，それぞれの内容を検討している。その上で，それらに共通する静態的な市場像から導かれる理論的帰結と，移行諸国で生じた転換不況という現実とを照らし合わせることで，そうした市場像の静態性を再考する。これは新古典派の理論的批判であるだけでなく，市場経済についてのヴィジョンの違いが改革のヴィジョンの違いとなって現実化したことを示すことで，政策論的批判にもなっている。希少資源の有効利用を一時点でとらえる主流派の市場像が急進的な「ショック療法」を支持する理由を提供しただけでなく，その結果として生じた転換不況とレントシーキングの深刻化がその後の発展スタイルに深刻な影響を与えたと論じることによって，主流派経済学に内在するヴィジョンから導かれる政策の限界を指摘している。

第二章は，前章と対照的に，移行経済に対する代替案として中国の漸進的改革を再考することで，その背後にある市場像を明らかにし，中国で実施された「漸進」が単に改革速度の遅さを指すわけではないということを論じている。この漸進性について，改革の初期条件による説明が十分な答えを与えないことを示し，次いで，中国政府が掲げる「社会主義市場経済」という概念にその意味が表れているかどうか検討している。その上で，中国の改革で中心的役割を果たしたものとして「郷鎮企業」と「双軌制」を取り上げている。中国の改革は速度の上で「漸進」と呼ばれるものであったとしても，それより

はむしろ調整様式（市場／計画）や所有形態（国有／非国有）における複数制度の併存（双軌制）を特徴とするものであり、そのことで反対意見を極力小さくすることを重視したものである。

その特徴は、第一に、社会主義的旧制度の残存が分配上のセーフティーネットとしての役割を果たすことで、既得権益者の反対を最小限にしつつ、新たな活動を促進したということ、第二に、レントシーキングを排除するのではなく、むしろ生産的な方向に向けさせた、ということである。中国の改革は、東欧ソ連の急進的移行と異なり、非効率を一時点で静態的に排除しようとするよりも、過程としての改革をダイナミックに進めるためのインセンティブに富むものであったために、その後の高い経済成長を達成できたのである。

第三章では、市場像の一部を構成する経済主体像から移行の問題にアプローチを行う。合理的な経済主体の活動に任せれば自然と望ましい制度が生じるという考えが前提されているが、それは移行経済においても、資本主義経済の場合と同様の合理的な経済主体像が想定されていたからである。その結果として生じたロシアでの「資産収奪」の例を述べた後、それと比較して、中国がうまく主体の行動を制限したと同時に、新たな経済的活動を生み出したことを指摘することで、主体の合理性を必ずしも前提としない経済学に可能性があることを示唆した。実際、ロシアでは、中国とは対照的に、非効率なレントシーキングの排除を追求した結果、かえって頑強な抵抗を生み、レントシーキングが経済主体のルーティンとして定着した結果、大きな資産流失が生じた。主体に関するヴィジョンの違いもまた市場像の違いを形成していることを示すケースであると言えよう。

本論文の大きな貢献の一つは、1990年代に生じた移行経済を巡る「急進 vs 漸進」という改革速度に関する議論を「市場像」という視点から捉え直したことで、1920年代の「社会主義経済計算論争」や1960年代の「資本主義・社会主義の体制収斂論」におけるのと同じく、論争がヴィジョンの違いに起因することを明確に示した点にある。そして、異なるヴィジョンに基づいて実施された制度改革が異なる結果を帰結したことから、ヴィジョンの違いが理論上の差異だけでなく、政策上の差異を生み出したことを指摘している点も重要である。

このように、ヴィジョンから導かれる理論およびそれに基づいて実施された移行経済の改革政策を評価するという視点は、国内外の移行経済や中国経済に関する研究論文においても類を見ないオリジナルな着想であり、この点で本論文は野心的で優秀な研究である。ただし、扱っている事例は限定されているため実証的根拠が不十分な点、中国の改革における市場像に関して省や県など各レベルの地方政府の差を十分に考慮に入れられていない点は今後の課題といえる。

以上のような問題や課題が残されているものの、本論文はソ連、東欧、中国という広範囲の社会主義経済の移行ないし改革を使った力作として先に述べた優れた点を備えているので、本経済学研究科の課程博士（経済学）の学位を授与するに値すると審査委員会は全会一致で判定した。